

蕭白画と文芸

—鷹と動物を中心に—

波瀬山 祥子 大阪大学

曾我蕭白の作品は、剛胆な筆致や鮮烈な色彩が印象的だが、主題の扱い方にも独特のものがある。これに関しては、人物画を主として、辻惟雄、マニー・ヒックマン、狩野博幸、佐藤康宏、山口泰弘、伊藤紫織、浅野秀剛、ミウオシュ・ヴォズニ氏ら先学によってさまざまな解釈が提示されてきた。それらの作品には、主題の意図を変容させ、時として重層的な意味を含んでいる場合がある。それは観者の側からすれば、多様な解釈を可能としているともいえ、そのような絵の前のさまざまな「語り」を誘発するきっかけとして、蕭白自身も親しんだ俳諧をはじめとする文芸の場が想定される。

そこで、本発表では、これまであまり触れられてこなかった蕭白画の鷹など、動物の表現と文芸との関わりを読み解くことによって、観者とともに生成した蕭白画の特徴を考察していく。

まず、「鷹図押絵貼屏風」(六曲一双、個人蔵)を取りあげる。鷹は、蕭白が自ら末裔と称した曾我派の得意とした画題であり、障屏画や掛軸まで作例が多い。本作が架鷹図ではなく、自然景の中に鷹を配す押絵貼形式であるのは、曾我二直菴から田村直翁や三谷等宿などに展開した方式であろう。ただ、本作には先行作例には見られない不思議な図様が複数ある。例えば、冬の湖水に映る鷹を描く一図は、光学的な物の見方と関連して注目されてきたが、実はこの図様は『新古今和歌集』から謡曲『野守』へ引き継がれた「野守の鏡」の話を下敷きにしたものではないだろうか。また、月下に鷹のシルエットを描く一図も光の表現を意識したものだが、鷹の止まる木の垂枝が鷹の尾に重なるように描かれることから、柿本人麻呂の和歌「あし引の山鳥の尾のしだり尾」を彷彿とさせる。また、梟や蝙蝠とともに鷹を描く一図は、享保12年(1727)に刊行された談義本『田舎荘子』に載る「木兔の自得」の話を下敷きにしている可能性が高い。

これらはその一部であるが、代表作の一つである旧永島家襖絵にも、鷹、梟、蝙蝠、あるいは牛、狼、貉などの動物が登場する。なかには、席画と思われるものもあり、その画題の選択と扱いは同時代の文芸と深く関わっているように思う。例えば、牛と木に登る童子を描いた「牧牛図」については、山口泰弘氏が「西行戻し」の逸話との関連を指摘しているが、発表者はそれに加えて襖絵の制作時期と同じ、明和元年(1764)に刊行された『存心』との関連を述べたい。本書は伊勢の儒者奥田龍溪の狂歌集で、蕭白が下巻の挿絵を手掛けており、なかでも犬と猿を描く図とそこに付された狂歌は、「牧牛図」との相関を窺わせ注目される。

こうした鷹をはじめとする動物画の意味を問うことによって、人物画の主題の扱いについても再検討し、遊歴する画家であった蕭白の作品について新たな視点から考察を加えたい。

(はせやま・しょうこ)